

## 「初期ナショナリスト」<sup>(1)</sup> が生まれるまで —— 19世紀末英領ゴールドコーストにおける S. R. B. アットー＝アフマの宣教活動——

溝辺泰雄

はじめに

「アフリカ争奪戦 (Scramble for Africa)」が本格化した 19 世紀末、現在のガーナ共和国南部にあたるゴールドコースト直轄植民地政府は、仏独政府との東西境界線策定交渉や北部地域の保護領化を積極的に進めていた。総督の直接の統治下に置かれた海岸部の「直轄領 (Colony)」では、1880 年代に、「公共労働法令 (Public Labour Ordinance)」、「原住民裁判権法令 (Native Jurisdiction Ordinance)」<sup>(2)</sup>、そして「原住民刑務所法令 (Native Prisons Ordinance)」など、現地労働力の徴用や現地首長の権限制約を目的とする法令が立て続けに施行された。そうした状況のなか、直轄領全体を巻き込む政府反対運動が起きた。その原因は、1897 年 3 月 10 日に植民地政府が提出した「1897 年土地法案 (Lands Bill, 1897)」であった。「公共地 (Public land)」の管理権をゴールドコースト政府に与えるという同法案の内容は、それまで自らの土地所有システムを自らの統治組織によって維持管理してきた現地のアフリカ人にとって極めて受け入れ難いものであった。そのため、同年 5 月、同法案の成立を阻止するために J. M. サーバー (Sarbah, John Mensah: 1864-1910)<sup>(4)</sup>、J. E. ケイスリー＝ヘイフォード (Casely Hayford, Joseph Ephraim: 1866-1930)、そして S. R. B. アットー＝アフマ (Attoh Ahuma, Samuel Richard Brew: 1863-1921; 以下、アフマとする) らが中心となって「ゴールドコースト原住民権利保護協会 (ARPS)」が

(1) 本稿における「初期ナショナリスト」とは、20 世紀中葉の独立運動には直接関わっていない、第一次大戦以前の現地ナショナリズム運動を主導した人物を指す。

(2) 同法令は 1878 年に立法審議会の承認を得たが施行されず、更なる審議の上で内容を一部修正したものが 1883 年に施行された。

(3) 「直轄領内の全ての公共地は、本法令に定められる通り、政府によって管理される。」A Bill intitled 'The Lands Ordinance, 1897'、第 4 条 (*Government Gazette*, 10 March 1897 に掲載)。

(4) 括弧内の年代は、特に言及がない限り生年を示す。以下同様。

結成された。従来の研究は、この ARPS による「土地法案」反対運動を、「ゴールドコースト全域で組織された初めての抵抗運動であった」と位置づけている<sup>(5)</sup>。

この当時、メソジスト教会の機関紙『ゴールドコースト・メソジスト・タイムズ』の編集長であったアフマは、「一般大衆の反対<sup>(6)</sup>」にもかかわらず総督側が一方向的に法案の審議を進めたことに対し、「ゴールドコーストの土地は我々のものであり、如何なる者も審議会での全会一致なしに土地を管理する権利を有さない」と主張する<sup>(7)</sup>など、ARPS のメンバーの中でも激しい政府批判を展開した。アフマは教会の機関紙上で政府批判を行ったという理由で、牧師として所属していたメソジスト教会から除名されてしまう。しかし、その後も彼はアメリカの黒人系教会（アフリカ人メソジスト・シオン聖公会）の支援を受け、引き続きアフリカ人の権利保護運動を主導した。また彼は、民族性の重視を訴え、西洋の模倣ではなくアフリカ従来の「簡素な生活に戻る（Back to the Simple Life）」がゴールドコーストの進歩・発展への鍵であり、「退歩こそが進歩である（Retrogression is the only Progression）」<sup>(8)</sup>と主張した。そうした信条の一つの実践として、彼は幼少時に名付けられたソロモンという自らの西洋名を放棄し、「アトー＝アフマ」という民族名を名乗り、他のキリスト教徒にも民族名の使用を勧めた。こうした経歴から、従来の研究は、彼の活動を「熱烈なナショナリズム<sup>(9)</sup>」もしくは「ナショナリスト的熱狂<sup>(10)</sup>」と形容し、ゴールドコースト政治史・思想史における「ナショナリスト知識人<sup>(11)</sup>」の先駆けと位置づけてきた。

その一方で、アフマは次のようなこともおこなっている。アフマがガーナ南西部のメソジスト教会アズィム（Axim）分教区の監督として職務を執っていた 1895 年、教区内のアポロニア（Appolonia）で同一の母親から 10 番目に産まれた子供を生き埋めにして殺す「伝統慣習」が実践されていることが教会関係者の間で問題とされた。当時 32 歳だったアフマは、早速当地に赴き、子供が儀礼の対象となりつつあったエジヨ（Edwo）という女性を「保護」する一方で、当時の現地首長に当該慣習の廃止を求める要請書を、そしてアズィム地区弁務官（イギリス人行政官）に同慣習廃止へ向けて、法的措置の検討を求める請願書を送付した。アフマはこの一連のやり取りを『メソジスト・タイムズ』で詳細に報じた。アフリカ人の民族性を重視するアフマが「伝統慣習」を批判し、植民地当局にその廃止への措置を打診したという事実は、従来の研究がアフマの特徴として取り上げる「熱烈なナショナリズム」とは大きな対照を示しているようにも見える。

---

(5) D. Kimble, *A Political History of Ghana: The Rise of Gold Coast Nationalism 1850-1928* (Oxford, 1963), p. 330.

(6) *The Gold Coast Methodist Times* (以下、GCMT とする), 16 July 1897.

(7) 'Affairs of the Gold Coast', *GCMT*, 31 July 1897.

(8) S. R. B. Attoh Ahuma, *Gold Coast Nation and National Consciousness* (London, 1971[1911]), pp. vii-viii.

(9) R. W. July, *The Origins of Modern African Thought: Its Development in West Africa During the Nineteenth and Twentieth Centuries* (London, 1968), p. 329.

(10) L. H. Ofose-Appiah, 'Attoh-Ahuma, S. R. B.', in *Dictionary of African Biography, vol. 1, Ethiopia-Ghana* (New York, 1977), p. 206.

(11) C. Wauthier, *The Literature and Thought of Modern Africa: A Survey* (London, 1966), p. 267.

この原因は、従来の西アフリカ思想史研究が、「1897年土地法案」以後のアフマの著作又は記事を考察対象としていることにある。アフマの思想は、時代の経過に応じて、その論調に変化が生じており、先行研究は彼の思想の一面（「ナショナリスト的」側面）のみを取り上げるに留まっている。加えて、アポロニアの慣習廃止へ向けてのアフマの働きかけは、筆者が2005-6年にガーナ国立公文書館（PRAAD）で実施した文献調査において確認されたものであり、上記の思想史研究に加え、ガーナナショナリズム史研究の重要文献とされるキンブルの研究<sup>(12)</sup>やガーナメソジスト教会史の主要研究であるバーテルスの研究<sup>(13)</sup>においても言及されていない。本稿は、「ナショナリスト以前」のアフマの活動を描くことで、英領西アフリカの「初期ナショナリスト」の形成に至るまでの一事例を提示し、アフリカ思想史研究に新たなアフマ像を提供したい。加えて、ゴールドコーストの西端に位置するアポロニアは、19世紀初頭から、植民地政府に対する「敵対的姿勢」と中心地域からの遠隔地という地理的条件によって、イギリス政府はその「統治権」を放棄することがあった。しかし、19世紀末のアフリカ分割の際、アポロニア地域は英領ゴールドコーストに属することになり、現在のガーナ国境もその境界を受け継いでいる。本稿は、「第十子殺し」慣習の廃止に向けておこなわれたアフマと現地首長との交渉が、ゴールドコースト西端地域の英領化に与えた影響についても考察したい。

## 1 19世紀のゴールドコースト<sup>(14)</sup>におけるキリスト教宣教団の活動とアフマ

### （1）ゴールドコースト地域におけるキリスト教宣教活動

ゴールドコースト地域におけるキリスト教宣教活動の歴史は、ヨーロッパ人（ポルトガル人）が初めて当地に到来した15世紀末までさかのぼる。1471年にポルトガル人のカトリック教徒が、シャマー（Shama）に木の十字架を立てたことがキリスト教宣教活動の始まりとされる<sup>(15)</sup>。後にポルトガル人がエルミナ（Elmina）に交易城砦を建設し、その城砦内でカトリック教徒による小規模な宣教活動がおこなわれた。しかし、17世紀前半にオランダ人がポルトガル人保有の城砦を攻撃し、ゴールドコースト地域の交易城砦を占有したことにより、ポルトガル人に

---

(12) Kimble, *A Political History of Ghana*.

(13) F. L. Bartels, *The Roots of Ghana Methodism* (Cambridge, 1965).

(14) 現在のガーナ共和国の前身にあたるイギリス領ゴールドコースト直轄植民地は、海岸地域の「ゴールドコースト直轄領 (Gold Coast Colony)」と、内陸部の保護領「アシャンティ (Ashanti)」及び「北方諸領土 (Northern Territories)」、そして東部の「委任統治領トーゴランド」から構成される。本稿で用いる19世紀後半の「ゴールドコースト」とは、海岸地域の「ゴールドコースト直轄領」のことを指す。なお、「アシャンティ」は、当時のイギリス人が用いた英語呼称で、1902年の保護領化の際も行政区分名にこの名称がそのまま用いられた。しかし、原語では「アサンテ (Asante)」と表記する。そのため本稿では、植民地行政区分を示す際及び当時の史料の原文を引用する際を除き、「アサンテ」を用いる。

(15) K. Damuah, *Catholic Church in Ghana, Centenary Edition* (Cape Coast, 1980), p. 5.

よる宣教活動も完全に廃止された<sup>(16)</sup>。その後も小規模な宣教活動が試みられることはあったが、人的・財政的に極めて限られた条件に加え、現地の人々のキリスト教に対する無関心もあり、18世紀に入っても活動が本格化することはなかった。

組織的な宣教活動の最初とされるのは、福音普及協会 (Society of the Propagation of the Gospel [SPG]) が、1752年に西部赤道アフリカ監督管区内に設置したゴールドコースト宣教団 (Gold Coast Mission) による活動である<sup>(17)</sup>。最初の SPG の宣教師は、T. トンプソン (Thompson, Thomas) で、1752年から1756年までケープコースト城砦内で活動した。彼の活動は、ケープコースト出身のフィリップ・クワケ (Quaque, Philip) が引き継いだ。クワケは1765年にロンドン主教 (Bishop of London) に任命され、宗教革命以後、国教会の聖職叙任を受けた初めての非ヨーロッパ人である。彼は、限られた規模ながら、混血の子供のみならずアフリカ人の子供への宣教もおこない、優秀な子供を選抜してイギリスやシエラレオネの学校へ留学させるなど<sup>(18)</sup>した。しかしこの宣教団による活動も大きな成果は得られず、1824年に撤退した。

ゴールドコースト全域に及ぶ宣教活動が開始されたのは、1820年代後半からであった。19世紀を通して、宣教活動の拡大は相対的に遅かった。ガーナ人歴史家のブアーは、この背景として、初期のヨーロッパ人宣教師の死亡率が極めて高かったことと、キリスト教の教義が現地社会の信仰・慣習と対立したことの2点を挙げている<sup>(19)</sup>。しかしこの時期に開始された宣教活動は現在に至るまで継続されており、その点でそれまでの宣教活動とは一線を画している。この時期に宣教活動を開始したのは、長老派教会 (Presbyterian Church) とメソジスト教会 (Wesleyan Methodist Church) であり、両教会とも現在のガーナの中心的なキリスト教会となっている。前者はアクラ以東の地域を中心に、スイスに本拠を持つバーゼル宣教会 (1828年活動開始) とドイツに本拠を持つブレーメン宣教会 (1847年活動開始) が布教をおこなった。一方後者は、当時のゴールドコーストの中心都市であるケープコーストを中心としたアクラ以西の地域を拠点として、ウェスレイアン・メソジスト宣教会 (1835年活動開始) が布教をおこない、19世紀のゴールドコーストで活動するキリスト教会のなかで最も大きな影響力をもつようになった。

最初のメソジスト宣教師がゴールドコーストに来たのは、西部州ディクスコーヴ (Dixcove) で活動していた W. デグラフト (de Graft, William) らの強い求めによるものであった。デグラフトは1831年に「聖書の智慧を広める会 (Society for Promoting Scripture Knowledge)」を設立

---

(16) 1880年にアフリカ宣教会 (Society of African Missions) 所属の2名のフランス人宣教師 (Auguste Moreau と Eugene Murat) がエルミナで活動を開始するまで、ゴールドコーストでのカトリックの宣教活動は中断された。Ibid..

(17) S. R. Wood, *Handbook of the Gold Coast for 1907 and 1908, etc.* (Manchester, 1907), p. 133.

(18) 1788年には、ゴールドコーストとシエラレオネ出身の5人の混血を含む子供がリバプールで教育を受けていた。1792年にシエラレオネ会社がフリータウンに創設した学校には、1795年に最初のゴールドコーストからの子供が入学したと記録されている。Kimble, *A Political History of Ghana*, p. 64 note 6.

(19) F. K. Buah, *A History of Ghana*, second edition (Oxford, 1998), p. 132.

した人物で、フィリップ・クワケが創設したケープコーストの学校の卒業生であった。<sup>(20)</sup> 現地で活動する彼らの求めを歓迎して、イギリスのメソジスト宣教会がJ. ダンウェル (Dunwell, Joseph) をゴールドコーストに派遣した。彼は1834年12月31日にケープコーストに到着し、翌年より活動が開始された。しかし、初期の宣教師の例にもれず、ダンウェルや彼の後に派遣された宣教師は、ヨーロッパ人10人中6人が1年以内に死亡するほどの厳しい気候に適応できず、まもなく死亡してしまう。

そうした状況を受け、メソジスト宣教会は1838年にT. B. フリーマン (Freeman, Thomas Birch) を派遣した。母はイギリス人、父は西インド諸島出身であったフリーマンは、現地の気候にも適応した上、当時のゴールドコースト居留地 (Gold Coast Settlements) のジョージ・マクリーン (Maclean, George) 総裁の支援も受けて、ゴールドコースト海岸地

域におけるメソジスト教会の地盤を確固なものとした。<sup>(22)</sup> 内陸部の王国アサンテの都クマシへの宣教旅行をおこなうなど、初期の活動で上々の成果をおさめた後、フリーマンはイギリスに戻り、他の宣教師と共に1841年2月に再びゴールドコーストへ戻った。この時の宣教師の中に、シップマン (Shipman, Samuel Annesley) がいた。彼はアクラに駐在し、1842年に若手聖職者養成を目的とした神学校 (アクラ学院 [Accra Institute]) を創設した。最初に2名の現地出身の学生が入学し、後に6名に増員された。<sup>(23)</sup> シップマン以外の宣教師も、ディクスコーヴ、ソルトポンド近隣のドミナシ、そしてクマシを拠点に活動した。フリーマンは一時、ナイジェリアのラゴスやアベオクタまで宣教旅行をおこなうなど活動地域を拡げすぎたこともあり、1860年に一旦教会監督を退任する。教会監督はウェスト (West, William) が引きつぎ、メソジスト教会は1870年代までに、堅固な基盤を築くに至った。しかし、こうした成功の一方で、同教会はヨーロッパ人牧師の体調不良及び死亡といった問題を依然として抱えていた。この問題に



【図1】イギリス領ゴールドコースト直轄植民地 (筆者作成)

(20) Buah, *A History of Ghana*, p. 136.

(21) C. McEvedy, *The Penguin Atlas of African History*, new edition (London, 1995), p. 92.

(22) Buah, *A History of Ghana*, p. 137. 1841年時点で、メソジスト教会はゴールドコーストに3つの巡回教区(ケープコースト、アノマブ、及び英領アクラ)を設置していた。

(23) Bartels, *The Roots of Ghana Methodism*, p. 61.



S. R. B. アットー＝アフマ

(出典：Attoh-Ahuma, *Memoirs of West African Celebrities* [Liverpool, 1905], cover page)

対処するため、1877年からメソジスト宣教会は現地出身の改宗者が遠隔地での宣教活動を遂行できるように教育する方針を決定し、以後本格的に現地出身者が教会の聖職者に任命されるようになった。

## (2) 聖職者としてのアフマ：その生い立ち

1870年代後半にメソジスト教会が現地出身者の聖職者任用方針を明確に打ち出したことは、1863年生まれのアフマの進路決定にも大きな影響を与えることになった。それに加えて、彼の進路決定には、その生い立ちも非常に大きな位置を占めていた。彼の父であるJ. A. ソロモン(Solomon, John Ahoomah: 1818-98)は、先に触れた「アクラ学院」の最初の学院生の1人であった。アクラのジェームズ・タウンの首長の息子であったJ. A. ソロモンは、14歳の時、現地に駐在していたイギリス人司令官の推薦でアノマブへ派遣され、同地のメソジスト教会で聖書の講読をはじめとする宗教教育を受けた。1842年、「アクラ学院」に1期生として入学し、修了後の1852年に教会で聖職活動を開始した。1859年には現地出身者として2番目にメソジスト教会の牧師に任命されるほど、<sup>(24)</sup>J. A. ソロモンは当時の現地社会におけるエリートであった。

その息子であったアフマは、父と同じメソジスト教会の聖職者となるべく、ケープコーストのウェスレイアン初等学校とウェスレイアン・ハイスクールで教育を受けた。1886年、専門的な宗教教育を受ける目的で、同じく現地出身のK. F. エジール＝アサーム(Egyir Asaam, Kobina Fynn: 1864-1913)と共にイギリスへ派遣された。イギリスでは1886年9月から88年までの間、リッチモンド・カレッジ(Richmond College)で神学の指導を受けた。ちょうどこの時期、イギリスのメソジスト教会議は、現地教会の人員面での自立的運営を目指すべく方策を議論していた。同教会の宣教師評議会は、1888年に以下のような方針声明を教会議に提出した。

本評議会はアフリカ西海岸地域におけるヨーロッパ人宣教師の人員を漸次的に減員し、原住民の教会員(Native brethren)により多くの責任を与えることを計画している。これに合わせて、我々は数名の原住民をイギリスのカレッジで教育してきた。... アットー＝アフマ君やエジール＝アサーム君はリッチモンド[カレッジ]での就学中、優れた礼儀でもって自らを律し、クラスメートだけでなく学院長や教師たちから敬意と好感を得てきた。我々は彼らが自らの任務に献身し、現地における聖職活動が永続し成功することを心より望ん

(24) 1859年の時点で牧師に任命された現地出身者は、J.A. ソロモンを含めて4名(J. マーティン[1858年]とT. レイニング及びJ. オッソー＝アンサー [1859年])のみであった。

でいる。<sup>(25)</sup>

同評議会が2名を選出したもう一つの目的は、ゴールドコーストでの教育活動の普及を担う人材育成であった。そのため、アフマとアサームはロンドンのメソジスト・ウェストミンスター養成校での講義を受講した上で、同年ゴールドコーストへ帰国することになった。

帰国直後の9月14日、彼らは最初の公的行事としてケープコースト・ディバート・クラブの会議に招待された。「お茶を囲んで40名が参加<sup>(26)</sup>」した同会議で、ケープコーストの教会関係者が、2人の内のいずれかが、ゴールドコーストのエリート養成校（ムファンチピン・スクール）の校長になるべきとの提案をおこない、後にアサームがその職に就くことになった。1894年には、2人とも当時5名しかいなかった分教区監督（Superintendent）となっていただけでなく<sup>(27)</sup>、同年の教会議で、メソジスト教会の機関紙『メソジスト・タイムズ』の編集者に任命されるなど、現地教会組織の中心的位置を占めるまでに至っていた。こうした略歴からも明らかのように、現地で聖職活動をおこなうに至るまでのアフマの経歴は、現地メソジスト教会のエリートコースの中心を歩んできたといっても過言ではない。

## 2 メソジスト教会牧師としてのアフマ：西部地域での活動とその影響

### （1）アズィム赴任と日曜労働の禁止

前章でみた通り、アフマはメソジスト教会からエリート教育を受け聖職に就いた。聖職者としての初任地であるアクラで、アフマは自ら教師として学校教育にも積極的に取り組んだ。その後アフマは、1892年にゴールドコースト西部の貿易拠点であったアズィムへ異動となった。当時の新聞『ゴールドコースト・クロニクル』<sup>(28)</sup>は、アズィム赴任を前にしたアフマのために、様々な社交クラブや学校・教会関係の組織が「送別会」を開き、アクラ在住の主要人物がそれらに参加した様子を報じている。同年4月下旬に蒸気船「ボマ」号でアクラを離れたアフマは、ケープコーストを経由してアズィムへ到着した<sup>(30)</sup>。

アズィム赴任後もアフマは積極的に聖職活動をおこなった。赴任後にまず取り組んだ問題が、日曜労働の禁止であった。木材等の貿易に携わる人々が、キリスト教の「安息日」である日曜

(25) 'Missionary Committee Letter, 14 Dec. 1888', Bartels, *The Roots of Ghana Methodism*, p. 122.

(26) Bartels, *The Roots of Ghana Methodism*, p. 124.

(27) 1894年時点で、アサームはアクラ分教区、アフマはディクスコーヴ分教区に配属されていた。Bartel, *The Roots of Ghana Methodism*, p. 138.

(28) 1890年にシエラレオネ出身のJ. ブライト＝デイヴィス（Bright Davies, James）が創刊・編集した新聞。アクラを拠点とする現地出身の有力な貿易商が経営に携わった。

(29) 'General News', *The Gold Coast Chronicle* (以下、GCCとする), 28 March 1892 and 4 April 1892; 'The Rev. S. R. B. Solomon', *GCC*, 4 April 1892; 'The Ga-English Sunday Schools and The Rev. S. R. B. Solomon' and 'General News', *GCC*, 11 April 1892.

(30) 'General News', *GCC*, 2 May 1892.

日に経済活動をおこなう状態を問題視したアフマは、1892年8月14日付で、現地の貿易商、代理人及び船舶関係者に宛てて日曜労働の中止を促す意見書<sup>(31)</sup>を送付した。「この街における日曜労働に関して、連带的かつ確固とした行動を取る時が来ました」という言葉で始まる同意見書で、アフマは以下のように続けている。

主日 (the Lord's Day) に祈りを捧げ心に平安をもたらすことは、平日により良く、より優れた仕事をおこなうために身体を再生させるだけでなく、人間存在の2次的な目的 [労働] よりもずっと重要で永続的なものが他にあることを我々に思い出させてくれます。…主日を俗用に用い、その神聖さを汚し軽視することは、まさに神の法の正しさやその聖餐の創始を疑問視することであり、甚だしく明らかな反抗心でもって神 (the Eternal) のお言葉を扱うことに等しいのです。…郵船の動きを管理する権利をもっているのはあなた方貿易商のみなさんであり、それゆえ神聖かつ不可侵の安息日 (the Day of Rest) を遵守し、それを破る者にはもたらされることはない永遠の天恵に授かることができるかどうかは、あなた方の行動にかかっているのです。…それゆえ、身体的、道徳的、及び宗教的な理由から、神の法に故意に背くことで得られる益が何であろうと、天上の父なる神の知性、真実性、能力及び恒久性を信頼し、神が天におられる限り、神の神聖なる名において、神に崇敬と服従を示す限りいかなる者も悪に嘖まれることはない<sup>(32)</sup>と確信し、いかなる職業であろうと安息することを先んじて実践するよう、みなさんをお願いしたいと思います。

この意見書は、27の個人・法人の賛同者による署名と共に『クロニクル』に掲載された。このことから明らかなように、アフマの呼びかけは、アズィムの大多数の貿易商の賛同を得るに至った。『クロニクル』1892年9月12日号には、9月4日付の「通信員便り」として、以下のような一節が掲載されている。

アズィムは非常に良い手本を示すに至った。日曜労働の廃止を実現した最初の街となったのだ。ケープコーストでは、日曜日に荷揚げがおこなわれることはないが、英国方面便への荷積みは依然として行われている。これは望ましいことではない<sup>(33)</sup>。

また同紙は8月29日号の社説において、「我々はキリスト教政府の下にあるのだから、異教徒 (Pagans) が日曜日に『商売をしたり』、貿易に従事することに対して無関心でいては、キリスト教の精神と我々自身を調和させることができない」と日曜労働の禁止を支持した。その上で、アズィムでのアフマの取り組みを「祝福する」と評価している<sup>(33)</sup>。アズィム赴任後最初のアフマの取り組みとその成果は、彼のキリスト教の教義に対する忠実さと聖職活動への積極性

(31) 'Sunday Labour', GCC, 29 August 1892.

(32) 'From our Correspondent', GCC, 12 September 1892.

(33) Editorial, GCC, 29 August 1892.



に加え、ヨーロッパ人も含めた地元有力者との間に安定した関係を築いていたことも示している。

## (2) ゴールドコースト西端地域における宣教活動と改宗者の拡大

アフマがアズィムに赴任してから2年後の1894年、ゴールドコーストのメソジスト教会は、休刊していた教会の季刊紙を月刊新聞（『ゴールドコースト・メソジスト・タイムズ』）として復刊し、アフマにその編集を担当させることを決めた。同紙は、創刊当初、教会関係の情報が記事の中心を占め、宣教活動の進捗状況を報じる記事も多く目にされた。例えば、1894年9月29日号に掲載されたアズィム発の「教会情報（Church News）」<sup>(34)</sup>には、「我々の昼間学校（Day School）の子供たちが見せる知性は驚異的である。18ヶ月の学習で、最上級の少年は聖書を正しく読めるようになった」や「ボニェレ（Bonyereh）」<sup>(35)</sup>での宣教活動は相当な成果を挙げている。25名の少年が教会簿に登録された」など、アズィムを含むゴールドコースト西端地域における宣教活動の状況が報告されている。

また、同欄には、アフマ自身の活動にも言及がある。例えば、「当該教区の監督[アフマ]は、先日実施された西部地域の視察旅行で、ハーフ＝アシニー（Half Assinie）」<sup>(36)</sup>の首長を含む数名の若者を洗礼する光栄に浴した」や「ソロモン師[アフマ]は、アトゥアブ（Attuabu）」<sup>(37)</sup>の故ブレー王の第一未亡人を大きな喜びと共に教会の一員に迎えた。彼女は3ヶ月前に全ての[現地宗教の]偶像やお守りを海へ葬った」、また「エスィアマ（Essiamah）」<sup>(38)</sup>の王、王子、及び王女のキリスト教への改宗は、全ての人々を最も驚かせた。年嵩の王は、家族と共に、朝もしくは夜の礼拝に休まず参列している」とある。また1895年1月31日号にも、「ソロモン師が当地[アズィム]のウェスレイアン礼拝堂で除夜の礼拝式を執りおこない、礼拝堂は満員となり、式の荘厳さ（solemnity）に、普段の日曜礼拝には欠席している者まで多数参列した」との報告が掲載されている。これらの記事は、本人による活動報告ということもあり、掲載内容に誇張がないかどうかは精査を要する。しかし、アフマ赴任以降、アズィム周辺の現地支配層を中心にキリスト教への改宗が拡大したことは明らかである。

## (3) 「第十子殺し」の問題化とアフマの対応

ゴールドコースト西端地域における宣教活動が拡大しつつあった1895年1月、『メソジス

---

(34) 'Church News, Axim', *GCMT*, 29 September 1894.

(35) アポロニア領内、ペイン西隣の海岸町。

(36) アポロニア領内、ボニェレの西隣、コートジボワール国境付近に位置するゴールドコースト西端の海岸町。

(37) アポロニア領内、ペイン東隣の海岸町。

(38) アポロニア領内、アトゥアブ東隣の海岸町。

(39) 'Current Events and Church News', *GCMT*, 31 January 1895.



ベインのメソジスト教会 (2006年5月6日筆者撮影)



アズイムのメソジスト教会 (2006年5月7日筆者撮影)

ト・タイムズ』に「無実の子供の血」<sup>(40)</sup>というタイトルの社説が掲載された。アポロニア領内のエスアマに暮らすある母親の子が「忌まわしい慣習によって、10番目の子供という理由で生まれて間もなく命を奪われた」という問題が発覚したというのである。同紙はこの問題について、「今日においてもアポロニアで広く実践されている愚かで非人間的な慣習に対し、我々の政府が何らかの対応を取るべき時が来たように思われる。我々のキリスト教の政府が、不運にも10番目の子供だからという理由で、子供の殺人に寛容であることができるのか？」と述べ、この問題に対する政府の介入を求める立場を表明している<sup>(41)</sup>。現地アズイムのメソジスト教会も「殺人から救われた、もしくは道徳感がなく無知な両親から宣教団に差し出された全ての第十子を保護するための託児所を設置」<sup>(42)</sup>するなど、この問題に積極的に関わる姿勢を打ち出した。

翌96年6月、「第十子」というタイトルの社説<sup>(43)</sup>が、メソジスト教会が政府に対し「アポロニアで未だに実践されている組織的な魔術(diabolism)」に関する請願を提出したことを伝えている。同社説は、「この非道な慣習を廃止させるため、特別な法令(a special ordinance)の制定を求めることが我々の義務である」と述べている。しかし、それに対する政府の回答は、「当問題に関する子供の保護は、既存の法令で通常の殺人案件と同様に訴追可能であり、特別な法令を制定する必要はない」というものであった。こうした政府の対応の一方で、現地メソジスト教会は、教区教会議で子供の保護活動を正式に承認し、教会を挙げて保護活動を実施する方針を定めた<sup>(44)</sup>。

アズイム分教区の監督であったアフマも、報道だけでなく実際に保護活動に参加した。彼はアポロニア領内のアトゥアップで自らの子供が儀礼の対象になりつつあったエジヨという名の母

(40) 'The Blood of the Innocents', *GCMT*, 31 January 1895.

(41) 'Notes of Current Events', *GCMT*, 31 January 1895.

(42) 'Echoes from Circuit Reports', *GCMT*, 28 February 1895.

(43) 'The Tenth Children', *GCMT*, 30 June 1896.

(44) *Ibid.*

親とその子（クワミナ）を保護した。アフマはその際のやり取りを『メソジスト・タイムズ』に掲載した。<sup>(45)</sup>アフマは、このやり取りの内容を証明するために、エジョの宣誓供述書も作成し、合わせて『メソジスト・タイムズ』に掲載した。<sup>(46)</sup>エジョとクワミナは翌13日にアズィムに到着し、20日にクワミナの養母となるメアリー・ヘイフォードと共に蒸気船「ベンゲラ」号でシャマーへ移動、一方アフマは、アポロニアでの調査・救援活動を続けた後、22日にアズィムへ戻った、と報じられている。<sup>(47)</sup>



アズィム城砦（2006年5月6日筆者撮影）

アフマはアポロニアでの活動中の6月13日、アズィム城砦（Fort St. Anthony）駐在の地区弁務官（District Commissioner）宛の請願書を作成し、上掲の聞き取り調書と宣誓供述書を添えて提出し、あらためて同慣例廃止へ向けての政府の対応を求めた。<sup>(48)</sup>その一方で、同日付で、アポロニアの中心地ベインの首長アクア・エニマー王（King Ackah Enyimah）に、以下の書簡を送付した。

次の事実に対して貴殿の重大な関心を求めることが私に課せられた差し迫った義務と考えます。数ヶ月前、ボニエレとイロリンの人々が、エジョという名の貧しい女性に対し、独断的に3匹〔ママ〕の羊とジン1瓶という重い罰金を科しました。その理由は、アポロニア領内全域で実施され、多くの子供たちが秘密裏に命を奪われている非人道的な慣習に反して〔第十子を〕妊娠したことが、現地慣習法に違反したためとされています。貴殿は、この地域の最高首長であり、上記の二つの町は貴殿の統治権の下にある故、私は貴殿に対し、こうした罰則手続きを断固として認めず、当該案件に対して実際的かつ思いやりのある行動を取るよう求めざるを得ません。既に私は、エジョとその子を救出し、アズィムの我々の教会で保護しています。そこで是非貴殿の協力を得て、彼女から徴収された家畜の返還もしくは彼女とその子の生活の保護をして頂くことを求めます。神が貴殿にお与えになった偉大な影響力をもって、貴殿と貴殿の配下にある首長が、10番目の子供に科せられたすべての悪魔的な制度を直ちに廃止することを強く望みます。遥か以前より、この忌まわしい慣習は実践され、無数の貧しい無実の赤ん坊が虐殺されてきました。しかし、今日ではこうした行為は例外なく罰せられます。古い物事は消え去ります。古い秩序は新

(45) ‘Interview with Edwo, Attuabu’, *GCMT*, 30 June 1896.

(46) ‘An Affidavit’, *GCMT*, 30 June 1896.

(47) ‘Current Events, Axim’, *GCMT*, 30 June 1896; ‘Notes on Current Axim, Dixcove’, *GCMT*, 31 July 1896.

(48) ‘S. R. B. Solomon to District Commissioner, Fort St. Anthony, Axim, 13 June 1896’, *GCMT*, 31 July 1896.

しい秩序にその座をゆずりませぬ。貴殿の臣民の誰も、愚かにも自ら進んで絞首刑の縄に首を掛ける者はいません。神は偉大です。この世でも来世でも神の意思が関わらないものは存在しません。いかなる呪物を畏れてはなりません。神を畏れるのです。貴殿の治世が永く繁栄することをお祈りします。私は月曜日にハーフ・アシニーへ発ちます。貴殿の使者を私の下まで派遣すると共に、この件に関する貴殿の意見をお聞かせ頂ければ幸いです。<sup>(49)</sup>

エジヨの案件に関する処罰の実施並びに被害の補償、さらに同慣習の廃止を求める内容の書簡を受けたエニマー王は、翌 14 日に以下の返書をアフマへ届けた。

昨日付の貴君の書簡を確かに受け取りました。それに対し、貴君が言及した女性と彼女の 3 匹の羊とジンについて、貴君が私に伝えるまで、全く知りませんでした。貴君が求める使者の派遣については、全く同意し、その調査の結果を教えてもらえればあり難いです。貴君が言うアポロニアにおける第十子殺しについては、当方もよく了解した故、全ての首長及び臣民にその旨を伝えることとします。<sup>(50)</sup>

上記の返書が示す通り、アフマの要求はアポロニアの最高首長に受け入れられ、以降、政府の新法令制定を待たずに、同慣習は廃止の方向へ向かうこととなった。

『メソジスト・タイムズ』紙上でおこなわれた一連の「第十子殺し」報道は、1895 年の年始に端を発し、上記の書簡が掲載された 1896 年 7 月で一応の終息を迎えることになった。この間に発行された 10 号全てが、何らかの形でこの問題を報じ、論じた。特に、1896 年の 6 月 30 日号は、ほぼ全頁でこの問題を取り上げ、アポロニア問題の特集号の呈をなしている。こうしたことから、編集担当者であったアフマのこの問題に対する積極的な姿勢を伺うことができる。

また、この一連の活動で注目すべきは、現地首長及び現地社会におけるアフマの位置である。前節で触れたように、アフマはアズィム赴任後も引き続き宣教活動に尽力し、学校建設を通じた現地の若年層の教会活動への参加を促しただけでなく、ゴールドコースト西端地域の主要な首長のキリスト教への改宗を次々に実施した。日曜労働の禁止要求に際して、多くの現地貿易商の同意を取り付けたことから明らかなように、現地社会におけるアフマの影響力は相当な程度あったと判断することができるだろう。

アポロニア地域における旧来の「伝統慣習」であった「第十子殺し」は、「バドゥー (Badu)」

---

(49) 'Correspondence Between Rev. S. R. B. Solomon and King Ackah Enyimah of Beyin. Re Edwo', *GCMT*, 15 July 1896. 傍点は引用者。

(50) Ibid.

(51) 同紙は編集局の移転などの理由で 1895 年 3 月から 96 年の 2 月までの 1 年間休刊している。溝辺泰雄「19 世紀後半イギリス領ゴールドコーストの新聞事情」『アフリカ研究』68 (2006)、49 頁。

と呼ばれる同一の母親から 10 番目に産まれる子が社会に災禍をもたらす、という旧来の伝承に基づく実践であった。それだけに、この慣習は、現地の伝統信仰と結びつく重要な慣習であったとも言える。そうした旧来の慣習の廃止要求を、現地首長が大きな抵抗もなく受け入れるに至った背景には、アフマが主導したキリスト教の宣教活動が生んだ、現地支配層のキリスト教改宗への流れがあった。先に挙げたアトゥアボ王の未亡人による、現地宗教の偶像及び祈祷物の廃棄などは、その象徴的な例である。また、上掲のベイン王宛のアフマの書簡も、後半の部分で「いかなる呪物を畏れてはなりません。神を畏れるのです」と、現地宗教の放棄とキリスト教の神の受け入れを説いている。ガーナ人歴史家のブアーは、キリスト教会がガーナ社会にもたらした益の一つとして、魔術、予言、呪術、禁忌など、「結果として双子殺しなどの悪い慣習を生み出す、非常に疑わしい価値観の実践と信仰からの解放」<sup>(52)</sup>を挙げている。アポロニアにおける「第十子殺し」も、まさにこうした事例の一つとして位置づけられると共に、そうした事例にアフマという現地出身のエリート牧師が重要な役割を果たした事実も示しているのである。

### 3 アポロニアの英領化とアフマの宣教活動

アズィムを含むゴールドコースト西端地域は、イギリスがその管轄権を度々放棄してきた地域であった。そもそも 19 世紀末まで、ゴールドコースト地域におけるイギリスの支配は極めて限定的なものであった。1844 年 3 月 6 日に、当時のゴールドコースト居留地副総督ヒル(Hill, H. W.) と現地主要首長らとの間で、イギリス保有の城砦及びその周辺地域における「大英帝国及びアイルランド女王の権力と司法権の行使を認める」旨の 3 章からなる短い宣言(1844 年の「協約」<sup>(53)</sup>) が調印された。これによって海岸地域における商人会社による委任管理は終了し、イギリス政府が公式に統治をおこなうことになった。しかし、19 世紀前半において、イギリス政府の管轄下にあったのは、海岸地域に点在する交易城砦とその周辺地域に限られていた。

1850 年 1 月 24 日付の勅許状で、「ゴールドコースト地域の全ての城砦、領土、島嶼及び保有地」がシエラレオネ植民地から分離統治されることが命じられた。しかし、その後のゴールドコースト政府は、1852 年に実施した人頭税導入に対する地元の反対運動や、南進を繰り返す内陸部の王国アサンテの軍事的脅威に遭うなど、厳しい状況に直面した。そうした背景もあり、1865 年にイギリス下院で開かれたアフリカ西海岸に関する特別委員会は、シエラレオネを除く西アフリカ各居留地・保護領からの将来的な撤退を視野に入れ、現地社会への権限の漸

---

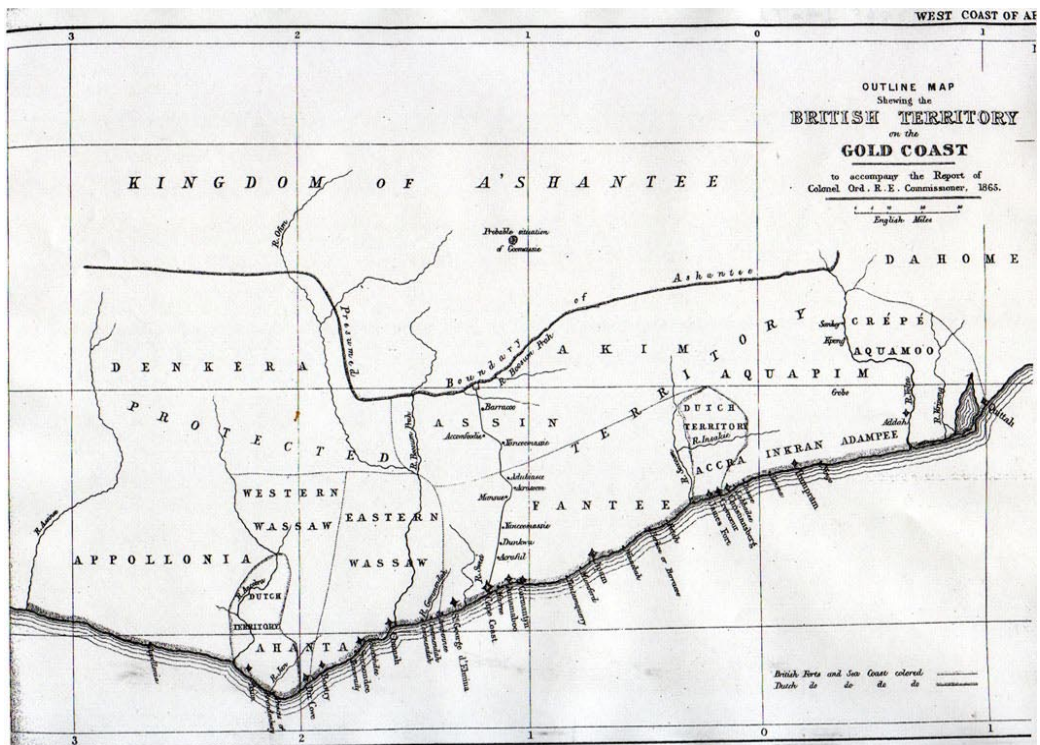
(52) Buah, *A History of Ghana*, pp. 139-141.

(53) 'Declaration of the Fante Chiefs (The 'Bond')', 6 March 1844', G. E. Metcalfe, *Great Britain and Ghana: Documents of Ghana History 1807-1957* (Aldershot and Brookfield, 1994), p. 196.

(54) Letters Patent, dated 24 January 1850; British Parliamentary Papers (BPP), House of Commons (H.C.) 383, Accounts and Papers (A&P) 1854-5, xxxvii.

次の委譲を勧告する決議を採択した。<sup>(55)</sup>この流れを受けて、翌1866年、ゴールドコーストは再びシエラレオネ政府の管轄下に置かれた。これによりイギリスは、ゴールドコースト西端地域の管轄権を放棄する方向へ議論を進めていくことになった。事実、1865年の下院特別委員会に提出されたゴールドコーストの地図(図2)では、アズィムとその周囲の地域はオランダ領とされている。

1867年にはイギリス-オランダ間で領有地の交換を定める協定が結ばれた。<sup>(56)</sup>この協定は、ケープコーストとエルミナの間を南北に走るスウィート川を両国保有地の境界とし、イギリスはベイン、ディクスコーヴ、セコンディ(Sekondi)、コメンダ(Komenda)などスウィート川以西の保有地を手放した代わりに、スウィート川以东の旧オランダ保有地をイギリスに移譲することを定めている。この英蘭保有地交換に伴って一方的にオランダ領とされたエルミナ以西の地域は、オランダの武力を伴う強圧的支配に苦しむことになった。オランダはアポロニア領内の町も複数攻撃し、破壊した。西部の主要都市であるコメンダとディクスコーヴはオランダに激しく抵抗したにも関わらず、それまで同盟関係にあったイギリスは全く行動を取らなかった



【図2】1865年のゴールドコースト(出典: 'Outline Map Showing the British Territory on the Gold Coast to Accompany the Report of Colonel Ord. R. E. Commissioner. 1865. '); BPP, H.C.412, A&P 1865, v, 407.)

(55) Resolutions of the Selected Committee on Africa (Western Coast), 26 June 1865; BPP, H.C.412 of 1865.

(56) 'Convention Between Her Majesty and the King of the Netherlands, for an Exchange of Territory on the Gold Coast of Africa, 5 March 1867'; BPP, H.C.3900, A&P 1867, lxxiv.

ことも指摘されている<sup>(57)</sup>。

その後、1872年にはオランダがゴールドコーストから完全撤退<sup>(58)</sup>したことにより、イギリスがゴールドコーストの海岸地域全域に影響力を行使出来る状況が生まれた。1868年にイギリスは、現地ファンテ諸国の首長が主導した自治組織結成への動き（ファンテ連合）を押さえ込み、1873年には対アサンテ戦に勝利するなど、影響力が及ぶ範囲が少しずつ内陸へも拡がりつつあった。

こうしたなか、本国植民地省内部でも1865年の特別委員会決議方針を転換し、ゴールドコーストを含む西アフリカ地域への積極介入を求める声が高まっていった<sup>(59)</sup>。1874年5月12日、イギリス議会上院で当時の植民地相（第4代カーナヴォン伯爵）が、ゴールドコーストをシエラレオネから再び分離し、ラゴスと併合して一つの直轄植民地を設立する旨の方針を打ち出した<sup>(60)</sup>。これにより同年7月24日、イギリス政府はゴールドコースト海岸地域及びラゴス直轄領を統合して「ゴールドコースト直轄植民地」を設立した（1886年にラゴスは分離）。以後、ゴールドコーストは、1902年の内陸部の保護領（「アシャンティ」及び「北方諸領土」）併合及び海岸部全域の直轄領化と、1919年の委任統治領トーゴの編入を経て、1957年のガーナ共和国の独立までイギリス帝国内の一直轄植民地として存続することとなった。

しかしここで注目すべきは、オランダが撤退する1870年代前半まで、イギリスはアポロニアを含むゴールドコースト西端地域における管轄権をしばしば放棄していた点である。同地域は、1874年の海岸地域における直轄植民地化により、制度上はイギリスの管轄下に置かれたが、実態は非常にあいまいなものであった。『クロニクル』1892年8月8日号には、アズィム地区弁務官宛の請願書<sup>(61)</sup>が掲載されている。「自らをイギリス臣民であると認識している…ゴールドコースト直轄植民地のベインとフランス領居留地のアシニーで活動する貿易商」によって提出されたこの請願書には、ゴールドコースト西端地域における木材の取引に従事する貿易商が、フランス当局による過度な取り締まりを受けており、イギリス領内での活動の保護を求める旨の請願が記載されている。同紙は次号の社説で、「もし我々の政府が責任あるものであり、明日立法審議会が開催されたなら、その場で総督は、出席した議員の顔を見て、アシニーにおけるフランス当局との関係は望ましい状況である、などと決して言えないだろう<sup>(62)</sup>」と述べ、同地におけるイギリス政府の早急な介入を求めている。このように1892年の時点でも、ゴールドコースト西端地域におけるイギリスの支配はあいまいなものであった。その理由として、歴史

---

(57) Agbodeka, *African Politics and British Policy* (London, 1971), p. 34; Buah, *A History of Ghana*, pp. 89-90.

(58) 'Convention Between Her Majesty and the King of the Netherlands for the transfer to Great Britain of the Dutch Possessions on the Coast of Guinea, 25 February 1871'; BPP, H.C.474, A&P 1872, lxx.

(59) 'Minute by E. Fairfield, Colonial Office, 24 March 1874', Metcalfe, *Great Britain and Ghana*, pp. 363-4.

(60) 'Speech by the Earl of Carnarvon, House of Lords, 12 May 1874', Metcalfe, *Great Britain and Ghana*, pp. 364-8.

(61) 'A Petition to the Axim D.C.', *GCC*, 8 August 1892.

(62) 'Ill-Treatment of British Subjects', *GCC*, 15 August 1892.

的にイギリスによる支配に激しい抵抗<sup>(63)</sup>を示してきたアポロニア地域の領有をイギリス政府がさほど重視していなかった点が挙げられる。

一方で、1892年は、アフマがアズィムに赴任した年である。前述の通り、この年以降、アズィム以西のアポロニア地域で、アフマが監督するメソジスト教会が積極的に宣教活動を実施した。一連の宣教活動を通して、現地支配層の間にキリスト教的価値観の受容が進み、若年層には学校教育を通して英語の使用をはじめとしたイギリス的要素が注入されることとなった。それと並んで、『メソジスト・タイムズ』によるアポロニアの「第十子殺し」報道は、ゴールドコーストの中心地域であるアクラやケープコーストの教会及び植民地当局関係者だけでなく、一般の人々にも西端地域のアポロニアの存在を再認識させるきっかけとなった。

さらに、1897年に植民地政府が導入を試みた「土地法案」が現地社会で大きな問題となった際、アズィム赴任中であったアフマは、『メソジスト・タイムズ』紙上で激しい政府批判をおこなう一方、現地エリート層と同法案について議論をおこなうだけでなく、アズィムとアポロニア領内の現地首長らにも共闘を呼びかけ、エリートと首長が共に参加した「ARPS アズィム支部」を組織するのに成功した。キンブルは、ARPSが「ゴールドコースト全域で組織された初めての抵抗運動であった」とする根拠の一つとして、アフマ主導のARPS アズィム支部が現地首長も取り込んだことを挙げている<sup>(64)</sup>。

しかしその一方で、アズィムとアポロニアのエリートと首長が共に抵抗した「土地法案」反対運動は、結果として、それまで別個の統治体制を保ってきたアズィム以西のゴールドコースト西端地域を、「イギリス領内の統一した地域」とすると自他共に認識させることとなった点も指摘しておかねばならない。

## むすびにかえて

従来の研究が焦点を当てる「ナショナリスト・アフマ」が頭角を現すのは、前節で触れた1897年の「土地法案」反対運動以後である。アフマは反対運動の活動中、『メソジスト・タイムズ』に様々な意見記事を掲載した。彼はその中の一つの意見書（「植民地か保護領か？」<sup>(65)</sup>）で、「土地の1インチ1インチ全てが我々のものであり、それは我々が改変されることなく所有し、保有し、そして管理するものである」と述べ、植民地当局による土地管理を徹底的に拒絶した。こうした確固としたアフマの態度を、同世代で後に20世紀前半の英領西アフリカ民族運動を率いることとなるケイスリー＝ヘイフォードは、「真のアキレス (veritable Achilles)」と称し讃えた。しかし、イギリスのメソジスト教会議は、「教会の機関紙で政治問題を議論すること

---

(63) 'Governor and Council to the Committee, 22 March 1819', Metcalfe, *Great Britain and Ghana*, p. 56; 'Proceedings of the Select Committee on West African Forts 1842'; BPP, H.C.551, A&P 1842, xi.

(64) Kimble, *A Political History of Ghana*, p. 341.

(65) Attoh-Ahuma, 'Colony or Protectorate-Which?', in Casely Hayford, *Gold Coast Native Institutions* (London, 1970 [1903]), pp. 311-326.



は当新聞の性格に適わない<sup>(66)</sup>と判断し、『メソジスト・タイムズ』は廃刊、アフマも教会を除名となった。その後のアフマは、ARPSの中心人物としてナショナリズム運動へさらに傾倒した。その一方で、洗礼時に命名された「ソロモン」という名を放棄して「アットー＝アフマ」という民族名を名乗っただけでなく、他の人々にも民族名や現地語の使用を促し、旧来の慣習の尊重を訴えるようになる。冒頭で挙げた、「回帰運動 (Backward Movement)」を唱えはじめのも、20世紀初頭以降の話である。民族性への回帰を訴える「ナショナリスト・アフマ」の姿は、前章で引用したベイン王宛の書簡にある「古い物事は消え去ります。古い秩序は新しい秩序にその座をゆずります」といった言葉と見事な対象を示している。19-20世紀転換期に顕在化したアフマのナショナル的要素への志向は、彼自身の思想的「転向」とも見做せるかもしれない。しかし、世紀転換期の西アフリカは「アフリカ分割」の最終局面を迎え、政治・経済・文化・社会、様々なレベルで大きな変化が生じた時期であった。それ故、「ナショナリスト・アフマ」の誕生の(もしくは、そのように見える状況を生み出した)過程を明らかにするには、更なる詳細な検証を要する。よって本稿は、そこへ至る前段階として、19世紀末までのアフマが、極めて忠実で熱意をもったエリート聖職者として、現地社会で受け入れられ、改宗者を拡大していったこと、そしてその活動が結果として、旧来の小規模な民族集団を超えた「イギリス帝国内のゴールドコースト」という、より大きな枠組みに依拠する意識形成に、間接的かつ意図せざる形ながらも重要な役割を果たしたことを指摘して、むすびにかえたい。

---

(66) Kimble, *A Political History of Ghana*, p. 349.